第６課　誰が律法を変更したか

【暗唱聖句】

「彼はいと高き方に敵対して語りいと高き方の聖者らを悩ます。彼は時と法を変えようとたくらむ。聖者らは彼の手に渡され一時期、二時期、半時期がたつ」ダニエル7:25

【今週のテーマ】

終末において安息日を守るということは、神様に対する真の忠誠を表すことになります。安息日は意図的に変えられました。だから正しく安息日の真理が回復されなければなりません。

【日曜日・約束】

「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」ローマ8:1

パウロがこのような結論に至った背景には、良い行いをしたいのにできないという自己矛盾の問題を冷静に見つめたことから始まりました。

「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」ローマ7:15

パウロは自分のしていることが分からないと言います。何が分からないのかというと、なぜ望まない罪を犯してしまうのかが分からないというわけです。自分が本来望んでいることではないこと、つまり罪を犯してしまう自分が分からないというわけです。そして驚くべきことに、罪を犯しているのは自分ではなく自分の肉なのだと、自分自身と罪を切り離して考えているのです。

「そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです」ローマ7:17、18

あまりにも都合が良い解釈ではないかと思うかもしれません。しかし、わたしたちが考えている以上に、罪の問題は重く、自分では解決できないということを教えているのです。パウロは自分の惨めさを嘆きます。

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」ローマ7:24

惨めな自分の罪深さに気づくとき、初めてキリストの十字架の贖いの意味が分かってくるようになります。パウロの「今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」（ローマ8:1）という言葉は、自分の罪深さ、惨めさを見つめた結果見えてきたパウロのキリストに対する信仰の結論です。この揺るがない救いの確信のもと、平安のうちに聖霊が一人ひとりに働いて、少しずつキリストに似たものへと変えられてくようになります。

【月曜日・律法と罪】

「律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです」ローマ7:12

律法によっては救われないと教えられているし、罪と直結しているためにあまり良いイメージが持てないという方もあるかもしれません。しかし、パウロがはっきり断言しているのは、「律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いもの」だということです。この点をまず誤解することのないようにしましょう。

「それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのでした」ローマ7:13

「では、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか」とパウロは話を展開します。もちろん、決してそのようなことはありません。問題なのは律法ではなく、罪なのです。罪がわたしたちに死をもたらすのです。そのことを律法が教えてくれるのです。しかし、残念なことに律法はわたしたちを死に至らしめる罪を指摘してくれますが、その問題を解決するものを何も提供してはくれません。それゆえ律法がもはや無効になったのだと主張する人たちもいますがこれは間違いです。なぜなら、律法は聖なるものであり、良いものであるからです。そして罪が何であるのかを知るためにも、今もなお有効なのです。罪を本当に自覚することなしに、キリストの必要もわからないからです。

【火曜日・安息日から日曜日へ】

他宗派のクリスチャンは、しばしば律法は廃止されたので安息日は守る必要はないとか、安息日は日曜日に変更されたと言います。そしてそれを裏付ける聖句があると主張します。

①「週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた」ヨハネ20：19

週の初めの日（日曜日）に弟子たちが集まっていましたが、これは安息日に礼拝するためではなく、ユダヤ人を恐れて共に集まっていたにすぎません。

②「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた」使徒20：7

パウロたちは週の初めの日（日曜日）の夜にパンを裂くために集まっていました。しかし、安息日が変更されたとは一言も書かれてありません。パンを裂くために集まっていたという表現が、聖餐式を行っているような印象を与えるかもしれませんが、使徒2：46を見ると「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし」とあるように、パンを裂くとは食事を共にすることを意味しているのであり、しかもそれはキリスト教が広まっていく中で毎日のように普通に行われていたことでした。しかも、パウロたちが集まっていたのは朝ではなく、夜だったことも礼拝をする時間としては不自然です。

③「わたしがそちらに着いてから初めて募金が行われることのないように、週の初めの日にはいつも、各自収入に応じて、幾らかずつでも手もとに取って置きなさい」第一コリ16：2

この聖句から、週の初めの日に献金を捧げるようにと命じているので礼拝が日曜日に行われていたと主張しますが、このような解釈は無理があります。普通にこれは献金は当日慌てて用意するのではなく、週の初めから前もって準備しておくようにということです。

このように安息日は週の初め（日曜日）に変更されたという主張を裏付けるとされる聖句は、どれも説得力に欠けるばかりか、間違った解釈であることがわかります。

【水曜日：新約聖書における第七日】

新約聖書で第七日安息日をきちんと守っていたという聖句をピックアップしてみましょう。

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった」ルカ4：16

「イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備した。婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ」ルカ23：55，56

まずイエス・キリストはいつも安息日には会堂に入り、礼拝を守っていたことがわかります。イエスさ・キリストの死なれた直後、婦人たちが安息日を守り休んだことが記録されています。つまり、イエス・キリストから安息日を初めの日に変更するようにという教えなど受けていないことを示しています。

「パウロとバルナバはペルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた」使徒13：14

「そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした」使徒16：12，13

使徒たちも安息日を守っていたことが記されています。

【木曜日：小さな角と安息日の変更】

これまで学んできたように、聖書の中には安息日が日曜日に変えられたことを示唆する記述はなく、逆にイエス・キリストも使徒たちもみな、安息日をきちんと守っていました。では、なぜ現在多くのクリスチャンたちが日曜日を守っているのでしょうか。実は、この背後には悪魔がいて、安息日が変えられることが預言されていたのです。

ダニエル書の中には、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、そしてローマの国々の興亡について預言的に描かれています。その中でローマ帝国の終盤に「小さな角」が大きな影響力を発揮するようになることが示されています。この「小さな角」とは、ローマカトリックの法王制のことを表しています。

「彼はいと高き方に敵対して語り、いと高き方の聖者らを悩ます。彼は時と法を変えようとたくらむ。聖者らは彼の手に渡され一時期、二時期、半時期がたつ」ダニエル7：25

彼（ローマ法皇権力）は時と法を変えようとたくらみます。律法の中で時に関するものは安息日です。「一時期、二時期、半時期」とは、時期は年のことで、3年半（42カ月、1260日）を表します。完全数7の半分がサタンに与えられた時間であり、1日を1年とする預言の計算では1260年がサタンに与えらえた時間です。ローマ法皇権が確立（538年）されてからフランス革命（1798年）で法皇権力が一旦途絶えるまでがちょうど1260年です。この後、2300日の預言（1844年）が成就し、天の聖所が回復されていきます。